

交野市

上 の 山 遺 跡 Ⅳ

一般国道168号（枚方大和高田線、天の川磐船線）道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

一〇〇九年十一月

2009年12月

財団法人 大阪府文化財センター

交野市

上の山遺跡 IV

一般国道168号（枚方大和高田線、天の川磐船線）道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター



1 木棺基検出状況（南から）



2 木棺基断面



1 壁穴住居 1 カマド検出状況



2 カマド縦方向断面



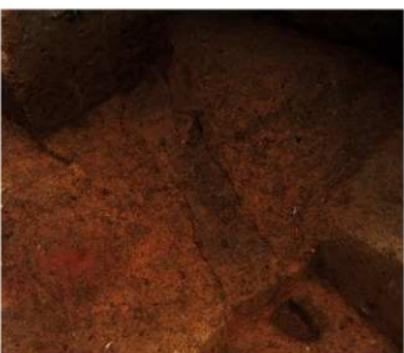
3 カマド内土器出土状況



4 カマド完掘状況



5 カマド下周壁溝検出状況①



6 カマド下周壁溝検出状況②

序 文

上の山遺跡は、大阪府の北東部、北河内の地に所在する枚方市と交野市の市境界に位置し、枚方丘陵の東端部から天野川の西側にかけて広がっています。

上の山遺跡の周辺は東高野街道が南北に縱断し、陸路の要衝の地にあたりました。そして今、京都と大阪間を結ぶ第二京阪道路が計画され、建設が続いています。上の山遺跡は、平成12年度の確認調査により新規発見された遺跡です。これまで数次にわたる調査がおこなわれ、数々の成果があがっています。

上の山遺跡は旧石器時代から中世にかけての複合遺跡です。中でも、弥生時代中期前半の独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物がみつかったことは特筆に値します。

今回の調査では大型建物の時期に營まれた墓が複数みつかりました。そのほかにも、古墳時代の竪穴住居と建物が検出されました。竪穴住居は造り付け竈を備えたもので、竈の天井部が崩落した状態でみつかっています。このように限られた面積での調査にもかかわらず、上の山遺跡における弥生時代の墓域、古墳時代の居住域が確認されたことは、当地の歴史を考えるうえで貴重な成果であるといふまでもありません。

最後になりましたが、調査にあたりまして、ご支援、ご協力をいただきました大阪府枚方土木事務所、ならびに大阪府教育委員会、交野市教育委員会の関係機関をはじめ、地元自治会等の皆様に深く感謝しますとともに、今後とも当センターの事業に、より一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年12月

財團法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例　　言

1. 本書は、大阪府交野市私部西5丁目地内に所在する上の山遺跡09-2の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、「平成21年度 一般国道168号（枚方大和高田線、天の川磐船線）道路整備事業に係る上の山遺跡発掘調査等業務」に依るもので、大阪府枚方土木事務所の委託を受け、財團法人大阪府文化財センターが実施した。委託期間は平成21年4月1日から平成21年12月28日で、うち発掘調査期間は平成21年4月1日から平成21年7月11日、出土遺物整理期間は平成21年7月13日から平成21年9月30日で、平成21年12月28日に本書の刊行を以って完了した。
3. 調査体制は、以下の通りである。
調査部長兼調査課長 福田英人、調査課調整グループ長 金光正裕、調査課調査グループ長 寺川史郎、京阪総括主査 三好孝一、副主査 奥村茂輝
4. 発掘調査期間中、木棺墓の構造について福永伸哉教授（大阪大学）より有益な御教示を得た。記して謝意を表します。
5. 現地での発掘調査では、大阪府枚方土木事務所、大阪府教育委員会、交野市教育委員会のご協力を得るとともに、関係各機関の方々のご指導、ご教示を賜った。感謝いたします。
6. 写真図版に用いた遺跡の垂直写真は株式会社ジオテクノ関西が、財團法人大阪府文化財センターの委託を受けて、平成21年度7月に撮影したものである。
7. 遺物写真については、調査課調査グループ主査 片山彰一が担当した。
8. 本書の執筆・編集は、奥村がおこなった。
9. 本書収録の写真・遺物などの記録類は、財團法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1. 発掘調査で使用した測量の標高は、東京湾平均海水位（T.P.）を基準とする。本文中および挿図で示される標高はすべてこれによる。
2. 発掘調査でおこなった測量は、世界測地系に準拠する平面図直角座標系第VI系を基準とする。
3. 本書で記す北は、座標北を示す。
4. 発掘調査及び整理作業は、当センターの『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』2003.8に従っておこなった。また遺物の取り上げ作業は、上記マニュアルにより定められた区画割に従いおこなった。地区割の第Ⅰ区画は7J、第Ⅱ区画は5である。なお遺物取上げ用ラベルへの記入は、第Ⅰ・Ⅱ区画は省略し、第Ⅲ区画以降を記入した。詳細は第2章第1節でふれている。
5. 地層の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』2008年版 農林水産省農林水産會議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
6. 遺構は、アラビア数字を用いて通し番号で名称を付けており、アラビア数字の後ろに遺構の形態・種類を表す文字を付している。例) 44溝
なお、複数の遺構の集合である、掘立柱建物・方形周溝墓・竪穴住居については遺構番号とは別に、遺構の種類を表す文字の後ろに、アラビア数字の通し番号を付して表している。
例) 掘立柱建物1、方形周溝墓1
7. 遺構番号は調査時に付した番号をそのまま用いている。したがって報告書中の本文・遺構挿図・遺構写真中の遺構番号は、調査時に作成した遺構図面、遺物ラベル、写真・遺物・図面台帳に記されている遺構番号と同一である。
8. 遺構の断面図・平面図は、対象により適宜縮尺を変え掲載しており、図ごとにスケールバーと縮尺を表示している。
9. 挿図中の遺物番号と、写真図版の遺物番号は対応している。
10. 遺跡分布図で用いた地図の出典は、各図に記した。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 調査の方法	2
第1節 発掘調査	2
第2節 整理作業	3
第3章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	6
第4章 旧地形の復原と基本層序	7
第1節 旧地形の復原	7
第2節 基本層序	7
第5章 調査成果	8
第1節 包含層出土遺物	9
第2節 弥生時代の遺構と出土遺物	10
第3節 古墳時代の遺構と出土遺物	16
第4節 古代の遺構と出土遺物	20
第6章 まとめ	26

挿図目次

第1図 調査地の位置	1
第2図 地区割の方法と調査区割	3
第3図 周辺の遺跡	4
第4図 調査区位置図	5
第5図 基本層序概念図	7
第6図 1区遺構分布図	8
第7図 2区遺構分布図	9
第8図 包含層（第1・2層）出土土器・石器実測図	10
第9図 方形周溝墓1平面・断面図	11
第10図 方形周溝墓2平面・断面図	12
第11図 方形周溝墓3平面・断面図	13
第12図 周溝内出土土器・石器実測図	14
第13図 28木棺墓平面・断面図	16
第14図 壁穴住居1平面・断面図	17
第15図 壁穴住居1カマド平面図・周壁溝完掘状況図	18
第16図 壁穴住居・柵列出土土器実測図	19
第17図 掘立柱建物1平面・断面図	20
第18図 掘立柱建物2平面・断面図	21
第19図 掘立柱建物3平面・断面図	22

第20図	44・52溝平面・断面図	23
第21図	44溝東端出土器実測図	23
第22図	上の山遺跡09-2遺構全体図	25
第23図	今回の調査成果と既往の調査成果	27
写真1	トラッククレーンによる撮影	2
写真2	作業風景	2

写真図版目次

卷頭カラー図版1

- 1 木棺墓検出状況 2 木棺墓断面

卷頭カラー図版2

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1 竪穴住居1 カマド検出状況 | 2 カマド縦方向断面 |
| 3 カマド内土器出土状況 | 4 カマド完掘状況 |
| 5 カマド下周壁溝検出状況① | 6 カマド下周壁溝検出状況② |

図版1 遺構

- 1 1区全景（左が北） 2 2区全景（上が北）

図版2 遺構

- | | |
|---------------------------|---------------------|
| 1 方形周溝墓1〔奥〕・2〔手前〕全景（南東から） | 3 方形周溝墓1南側周溝内土器出土状況 |
| 2 方形周溝墓1南側周溝内土器出土状況 | 4 方形周溝墓1北側周溝断面 |
| 4 方形周溝墓1北側周溝断面 | 5 方形周溝墓2北側周溝断面 |

図版3 遺構

- 1 方形周溝墓3全景（東から） 2 周溝内石庖丁出土状況（東から）

図版4 遺構

- | | |
|------------------|---------------|
| 1 掘立柱建物1全景（南西から） | 2 91柱穴断面（東から） |
| 3 92柱穴断面（東から） | 4 89柱穴断面（東から） |
| 5 90柱穴断面（東から） | |

図版5 遺構

- | | |
|------------------|---------------|
| 1 掘立柱建物2全景（南西から） | 2 66柱穴断面（西から） |
| 3 65柱穴断面（西から） | 4 69柱穴断面（南から） |
| 5 67柱穴断面（北から） | |

図版6 遺構

- | | |
|----------------|---------------|
| 1 64柱穴断面（北から） | 2 70柱穴断面（北から） |
| 3 71柱穴断面（東から） | 4 72柱穴断面（南から） |
| 5 61柱穴断面（西から） | 6 62柱穴断面（西から） |
| 7 63柱穴断面（北東から） | 8 76柱穴断面（東から） |

図版7 出土遺物（弥生土器、石器）

図版8 出土遺物（弥生土器、須恵器、土師器）

第1章 調査に至る経緯と経過

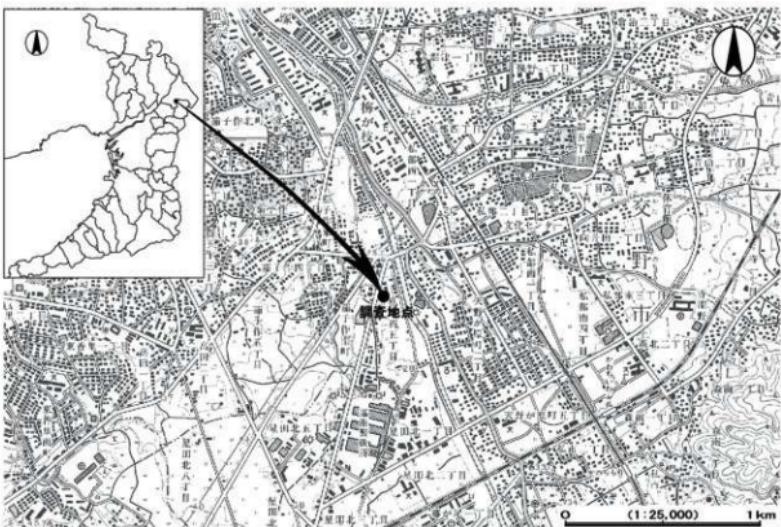
本書に記載する上の山遺跡09-2の発掘調査は、一般国道168号（枚方大和高田線、天の川磐船線）道路の整備事業にともなって実施したものである。遺跡は大阪府交野市私部西に所在する（第1・3・4図）。

平成12年度に財團法人大阪府文化財センター（以下センター）は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設予定地内において、茄子作遺跡の東側の開析谷底面部で確認調査を実施した。

調査では、弥生時代中期前半の溝、古墳時代の流路、奈良時代の遺構、さらに中世から近世にかけての水田遺構などが検出された。また出土遺物は、旧石器が出土したのをはじめ、繩紋土器、弥生土器（畿内第II様式）や石器、さらに古墳時代の須恵器・土師器、古代から中世にかけての須恵器・土師器・瓦器、陶磁器・瓦などが認められた。

以上の成果から、茄子作遺跡の東端部から中位段丘を挟んで天野川の氾濫原を東限とする範囲が、新規発見の「上の山遺跡」として周知されることになった（第3図）。

この確認調査の成果に基づいて、これまで当センターは平成15年から、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路の建設および、一般国道168号（枚方大和高田線、天の川磐船線）道路の建設にともない数次にわたって発掘調査を実施してきた。調査成果は当センターがこれまでに発行した調査報告書、『上の山遺跡I』（調査報告書第137集）・『上の山遺跡II』（調査報告書第155集）・『上の山遺跡III』（調査報告書第171集）に纏められている。今回の発掘調査は上に記した事業の一連であり、当



第1図 調査地の位置（平成12年国土地理院発行1:25,000枚方・生駒山に加筆）

センターが平成21年4月1日から、同年7月11日にかけて発掘調査を実施した。

調査にさきだって、当センターでは平成21年4月1日に大阪府枚方土木事務所と「平成21年度 一般国道168号（枚方大和高田線、天の川磐船線）道路整備事業に係る上の山遺跡発掘調査等業務」として、平成21年12月28日までの受託契約を結んだ。

第2章 調査の方法

発掘調査および整理作業においては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』2003.8に従っておこなった。

第1節 発掘調査

現地での発掘調査をおこなう前に事前調査を実施しており、周辺環境への配慮をはじめとして、大阪府枚方土木事務所など関係諸機関との調整をおこなった。調査では掘削土の仮置き場所の関係から、調査地を二つの調査区に分割した。調査区名は北側が1区、南側が2区である（各調査区の範囲については第6・7・23・22図参照）。

地区割については、国土座標（第VI座標系）を基準とし、I～VIの大小6段階の区画を設定した。これは大阪府内全域に共通する地区割である（第2図）。第I区画は大阪府の南西端X = -192,000m・Y = -88,000mを起点に、府域を南北15（A～O）、東西9（0～8）区画に分割したもので、一区画は南北6km、東西8kmとなる。第II区画は第I区画を東西、南北各4分割の、計16区画（1～16）に分けたもので、一区画は縦1.5km、横2.0kmとなる。第III区画は第II区画を東西20（1～20）分割、南北15（A～O）分割する一辺100mの区画である。第IV区画は第III区画をさらに東西、南北ともに10（東西1～10、南北a～j）分割した一辺10mの区画である。第V区画は第IV区画をさらに「田」の字状に4（I～IV）分割したもので、一辺5mの区画である。遺物の取り上げ作業ではこの地区割を用い、基本的に第IV区画の10m区画ごとにおこなった。遺物取上げ用ラベルへの記入は、煩雑となるため第I・II区画は省略し、第III区画以降を記入した。

調査時におこなった測量は、世界測地系に準拠する平面図直角座標（第VI座標系）を基準としており、標高値については、東京湾平均海水位（T.P.）を基準としている。遺構面の測量には、トラッククレー



写真1 トラッククレーンによる撮影



写真2 作業風景

ンによる空中写真測量を各調査区で一度ずつ実施した（写真1）。

調査時の掘削方法については、近現代の盛土・現代耕作土・明らかに近世以降に堆積したと判断できる地層を、重機を用いて掘削した。その後上部の地層から一層ずつ人によって掘削をおこない、遺構や遺物の検出をおこなった（写真2）。基本的には、第4層と呼称している自然堆積層の上面を最終遺構検出面としてとらえ調査を終了している。

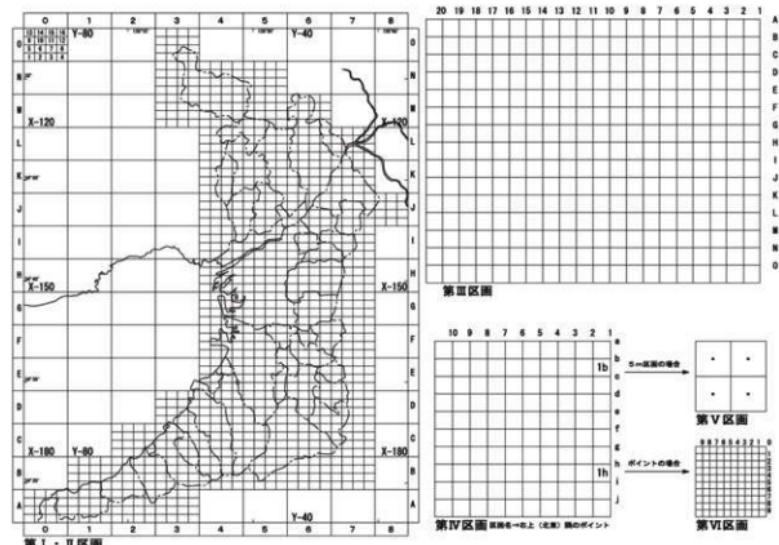
第2節 整理作業

今回の調査で、プラスチック製整理箱（54cm×35cm×15cm）5箱分の遺物が出土した。また調査期間中に作成した図面はA2版の方眼紙15枚にわたる。これらの遺物・遺構図面および調査中に撮影した写真について、平成21年7月13日から京阪調査事務所にて整理作業をおこなった。整理作業のなかで最終的には、報告書用の遺構図面版下と出土遺物図面版下を作成、報告書中の文書を作成し編集作業を経て本報告書を刊行した。

第3章 位置と環境

第1節 地理的環境

上の山遺跡は、生駒山麓の北側に派生する枚方丘陵の東端部、淀川にむかって北流する天野川の左岸にひろがる中位段丘上に立地する。遺跡の範囲は、東西約0.4km、南北約0.6kmにおよぶ。当遺跡の東側

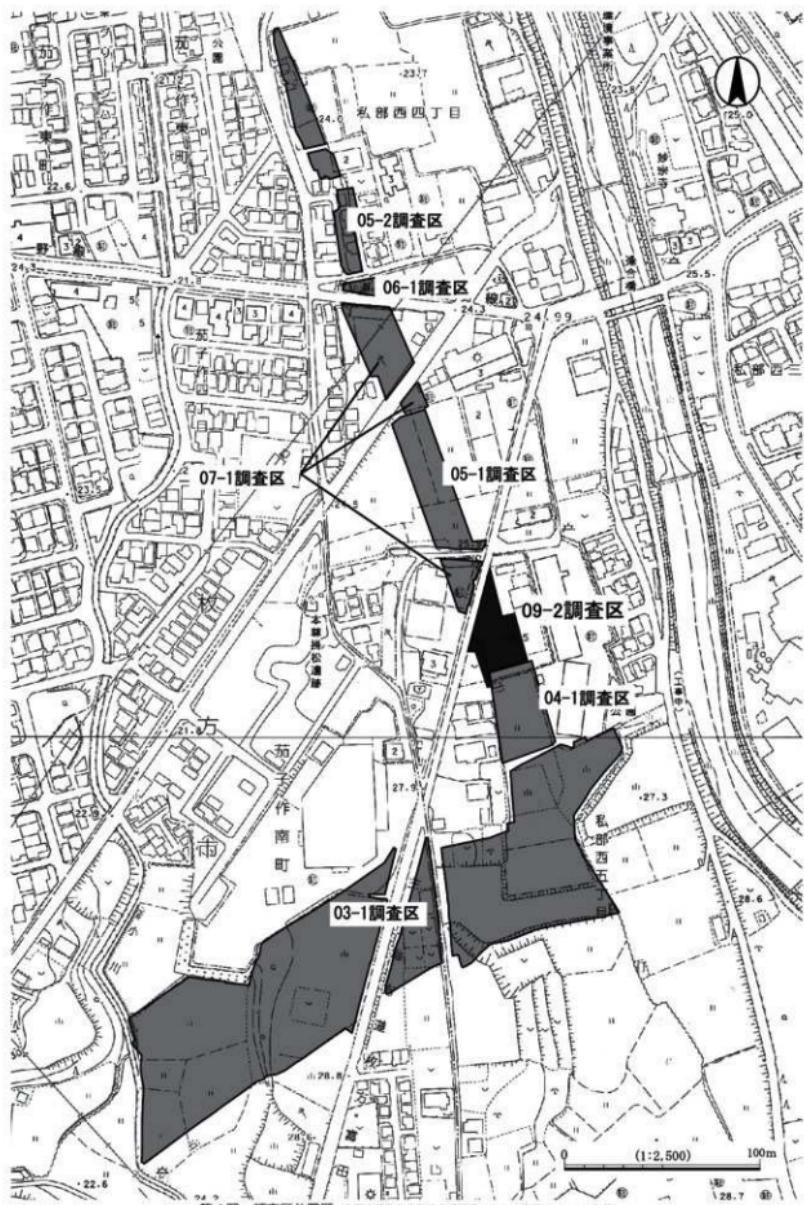


第2図 地区割の方法と調査区割



- 1 上の山遺跡
 2 山池塗窯跡群
 3 出屋敷遺跡
 4 甲斐田新町遺跡
 5 出屋敷西遺跡
 6 中宮・桃之宮古墳群
 7 野遺跡
 8 春日北野遺跡
 9 春日北川遺跡
 10 春日淵瀬集落遺跡
 11 禁野本町遺跡
 12 白雉塚古墳
 13 禁野上野古墳
 14 中宮ドンバ遺跡
 15 百濟寺遺跡
 16 百濟寺跡
 17 中宮尼寺田遺跡
 18 星丘西遺跡
 19 禁野車塚古墳
 20 星丘遺跡
 21 村野遺跡
 22 村野南遺跡
 23 郡津波引遺跡
 24 ハセデ遺跡
 25 交野郡衙跡
 26 郡津大塚
 27 郡津丸山古墳
 28 郡津梅塚
 29 廢長宝寺
 30 私部城跡
 31 私部城跡
 32 でがしろ遺跡
 33 私部南遺跡
 34 倉治遺跡
 35 燐垣内遺跡
 36 有池遺跡
 37 上私部遺跡
 38 神宮寺遺跡
 39 今井遺跡
 40 交野東車塚古墳
 41 車塚古墳群
 42 寺村遺跡
 43 大畠古墳
 44 須森寺遺跡
 45 森遺跡
 46 森古墳群
 47 岡東遺跡
 48 田宮遺跡
 49 山之上天堂遺跡
 50 山之上遺跡
 51 藤田町遺跡
 52 藤田山遺跡
 53 藤田山古墳
 54 藤田土井山遺跡
 55 中山觀音寺遺跡
 56 茂子作遺跡
 57 平池遺跡
 58 大将軍塚古墳
 59 茂子作下浦遺跡
 60 東香川南遺跡
 61 寝屋東遺跡
 62 穂領遺跡
 63 東高野街道

第3図 周辺の遺跡（平成12年国土地理院発行1:25,000枚方・生駒山に加筆）



第4図 調査区位置図(大阪府建築都市部統合計画課ベクトル地形図データに加筆)

は枚方市域に、西側は交野市域に入る。本書で報告する上の山遺跡09-2調査区は遺跡の北側部分にある。調査地は東にむけて低くなる傾斜面となる。これは調査地付近が、天野川の左岸に位置する河岸段丘上に立地しており、川にもかって低くなるからである。以下で述べる天野川左岸の遺跡は上の山遺跡同様、天野川左岸の中位段丘上に立地している。以上のような調査周辺の地理的特徴は、既往の調査および今回の調査で、包含層から旧石器が出土していることから、旧石器時代後期以前に形成されたものと考えられる。

第2節 歴史的環境

これまでの当センターによる上の山遺跡の調査は複数次にわたっており、すでに『上の山遺跡Ⅰ』・『同Ⅱ』・『同Ⅲ』として調査報告書が刊行されている。そのため本報告書では既刊の調査報告書との重複を避けるため、周辺の遺跡の概要のみを紹介する。

旧石器時代：上の山遺跡と茄子作遺跡から旧石器時代のサスカイト製ナイフ形石器・剥片が出土している。星田布懸遺跡からはナイフ形石器と剥片、石核が出土しており、石器製作場所の存在が想定されている。星丘遺跡と星丘西遺跡からは、どちらもナイフ形石器と舟底形石器が出土している。

縄紋時代：調査地周辺での縄紋時代の遺構・遺物の検出例はきわめて少ない。茄子作遺跡と上の山遺跡で、縄紋時代後期または晩期（滋賀里ⅠまたはⅡ式）の土器片が出土している程度である。

弥生時代：茄子作遺跡では、弥生時代中期から後期にかけての土器が出土している。上の山遺跡でのこれまでの調査では、遺跡の南側で弥生時代中期前半（畿内第Ⅱ様式）の独立棟持柱をもつ掘立柱建物や竪穴住居が検出されている。遺跡の北側では同じく中期前半の方形周溝墓が検出されている。星丘西遺跡では、生時代中期から後期の竪穴住居、方形周溝墓、円形周溝、土器棺墓などが検出されている。藤田山遺跡では弥生中期から後期にかけての竪穴住居やV字状の溝などが検出されている。

古墳時代：上の山遺跡周辺には古墳時代前期の森古墳群、藤田山古墳、禁野車塚古墳、古墳時代中期の車塚古墳群、古墳時代後期の白雉塚、倉治古墳群、寺古墳群などの古墳が分布する。とくに天野川流域に古墳時代前期の前方後円墳が集中していることは、この地域の首長層が大和政権の中枢部と深いかかりを持っていたことを想定させる。

集落遺跡では古墳時代前期から中期の竪穴住居が検出された茄子作遺跡、古墳時代中期の鍛冶関連集落と目される森遺跡があげられる。

古代・中世：上の山遺跡の北約1.5kmの地点には交野郡衙跡に比定される郡津遺跡が所在する。当遺跡を考古学的に郡衙とする調査事例はないが、歴史地理的な検討から交野郡衙に比定されている。また郡津遺跡の南半部には白鳳期創建と考えられる庵長宝寺が所在する。他にも調査地周辺には、白鳳時代創建と考えられる中山觀音寺跡や開元寺跡、奈良時代創建の百濟寺などの古代寺院が存在する。当センターがこれまでに実施した上の山遺跡の発掘調査では、現在の東高野街道と同方向の中世の道路遺構が検出されているほか、平安時代から中世の掘立柱建物を検出している。

第4章 旧地形の復原と基本層序

第1節 旧地形の復原

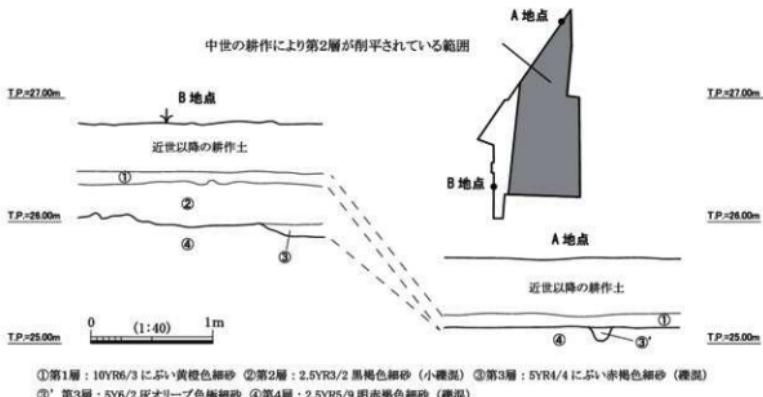
調査では現代の造成土、近世以降の耕作土を機械により掘削した後、上から順に第1層から第4層まで層序番号を付した。なお最終遺構面の地形状況は西側四分の一ほどが高く、東側との高低差は1.0m近くにおよぶ。地層観察の結果、これは近世以降の耕作状況を反映していると推測でき、西側で畠作、東側で水田耕作をおこなっていたため、西側の地盤が一段低くなったのだろう。そのため東側で水田耕作がおこなわれていた箇所では、弥生時代から古代にかけての遺物包含層は削平されてしまっている。ただし基盤層（第4層）上面の地形は、東の天野川にむけて低くなる緩傾斜を呈していたと考えられ（第22図）、調査区東端に近い地点では基盤層上面と水田耕作土層の下面がほぼ同じレベルとなっている。したがって調査区東端近くでは、わずかに弥生時代から古代の遺物包含層・遺構が残存していた。

第2節 基本層序

基本層序については第5図に概念図を示す。

第1層 中世の耕作土層と想定される。橙色ないしは黄橙色を呈する細砂もしくは極細砂で構成される。層中からの出土遺物が少量で、破片ばかりであるため詳しい時期決定はできない。下層の第2層と上層（近世の耕作土）の時期から中世と判断する。

第2層 古墳時代から古代にかけての地層で、黒褐色ないしは赤褐色を呈する細砂で構成される。層の下部で白色の小礫（径2~3mm）を多く含む箇所がある。層中からは旧石器時代のナイフ形石器から、9世紀の土師器まで長期間にわたる遺物が出土する。1区の全面および2区の東側では、中世の耕作により擾拌されているため第2層は残存しない。



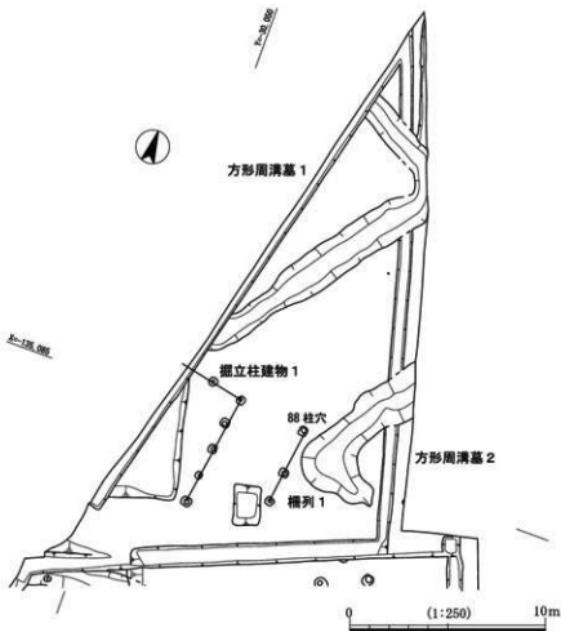
第5図 基本層序概念図

第3層 弥生時代に形成された地層で、方形周溝墓の溝内と周溝内部でのみ確認される。褐色ないしは赤褐色、もしくは灰オリーブ色を呈し、粒径はシルトから細砂にわたる。方形周溝墓の最下部で確認される第3層は、墓築造直後の自然堆積層と考えられ、基本的にはシルトで構成される。周溝の上部または周溝の内部で確認される第3層は、盛土ないしはその一部が崩落したものと考えられる。これらの層はそもそも下層の第4層を搅拌して形成されたものであることから、層中には第4層に含まれる白色の砂礫が多く確認された。弥生時代中期前半（畿内第Ⅱ様式）の土器が出土しており、同時期に形成された地層と考えられる。

第4層 赤褐色もしくは橙色の細砂で構成され、白色の小砾（径2~3mm）を多く含む。層中からの出土遺物は無い。

第5章 調査成果

第2・3層が残存していた西側の高台部分においては、第1層を除去した段階では遺構はまったく認められなかった。したがって以下に報告する遺構は西側の高台では、第2層を除去し検出された遺構である。いっぽう東側では第1層を除去した段階が遺構検出面である。

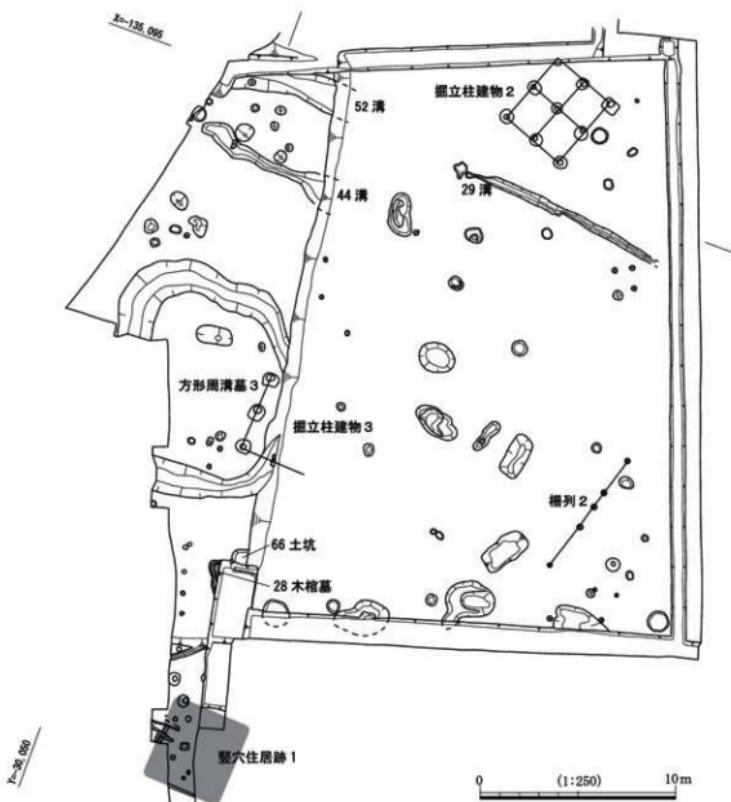


第6図 1区遺構分布図

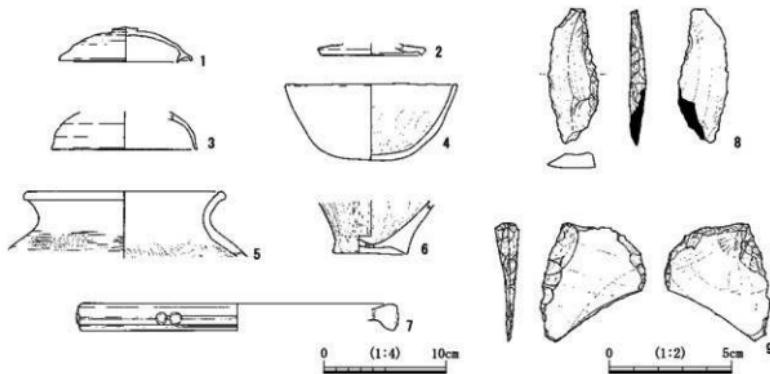
第1節 包含層出土遺物

第8図には遺構検出中に第2層から出土した遺物を掲げた。1(図版8)は須恵器杯蓋で7世紀中頃のものである。2は土師器高杯の脚部で内外面の調整は不明である。3は須恵器の杯蓋。2・3はいずれも6世紀代のものである。4(図版8)は土師器の楕で、外面調整は不明だが、内面には指頭圧痕が残る。5は須恵器甕の胴部から口縁部にかけての破片で、外面に平行タキ痕跡、内面に同心円状のタキ痕跡がみられる。4・5も2・3同様、6世紀代のものであろう。

6(図版8)は甕の底部で外面にハケ痕跡、内面に指頭圧痕がみられる。底部には直径5~7mm弱の孔が穿たれているが、この穿孔が焼成前のものなのか、焼成後のものなのか判断し難い。弥生時代中期



第7図 2区遺構分布図



第8図 包含層（第1・2層）出土土器・石器実測図

前半（畿内第II様式）のものと考えられる。7は壺の口縁部で、端部は下方向にやや肥厚する。外面には2条の四線紋と円形浮紋がみられるが、内面の調整は不明。弥生時代中期後半（畿内第IV様式）のものか。

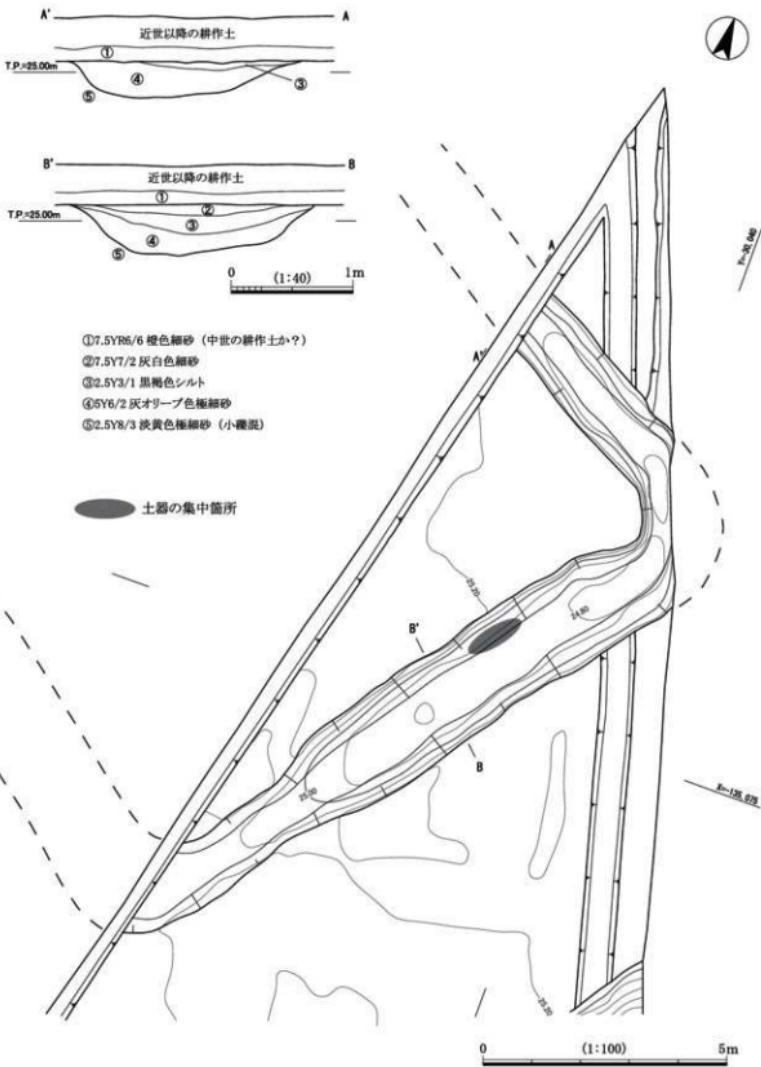
8は小型の国府型ナイフ形石器で先端部は折損、下端部は破損している。サスカイト製。翼状剥片を素材とし、背面には調整が施されている。旧石器時代のものである。9は二次加工痕跡のみられる剥片で、先端は折損している。サスカイト製。自然面を打面とし剥片を剥離。バルブが発達している。時期は不明。

以上のように包含層出土資料は、旧石器時代、弥生時代中期、古墳時代（6世紀）、古代（7世紀）の各時代に分けることができる。このうち旧石器時代を除く各時代の遺構が、上記の包含層を除去した同一検出面で確認された。以下にその内容を古い時代から記す。

第2節 弥生時代の遺構と出土遺物

方形周溝墓1（第6・7・9図、図版2） 1区の北側で中世の耕作土（第1層）を除去した後に方形周溝墓の一部を検出した。検出した範囲は方形周溝墓の南東部分で、本来の墓の4分の1程度の面積にあたる。南東部分のコーナーは調査区内で折れ曲がった状態で検出されている。南西部分のコーナーは西側の壁面で折れ曲がっている状況が確認できた。検出状況から西側の周溝を想定したうえで、周溝内側下端から割り出した埴丘裾間の距離は13mとなる。埴丘の盛土は中世以降の耕作行為で削平され残存しない。南西コーナー付近では周溝は浅く、検出面から底面までの深さは10cm程度である。一方南東コーナーでは周溝は深く、検出面から底面まで40cmを超える。

周溝の埋土は浅い箇所で2層、深い箇所で3層に分けられる。最下層（第9図④）は埴丘盛土の崩落土と考えられ、内側（埴丘側）の堆積が厚く、外側の堆積は薄い。最下層を除去し周溝底を検出すると、まばらではあるが土器が集中している箇所を検出した（第9図グレートーン部分、図版2-2）。盛土が崩落するよりも前に埴丘から転落した土器と考えられる。最下層の上層（第9図③）は黒褐色のシルトで、層中からは須恵器片が出土している。このことから周溝は、築造当初（弥生時代中期）から古墳



第9図 方形周溝墓1平面・断面図

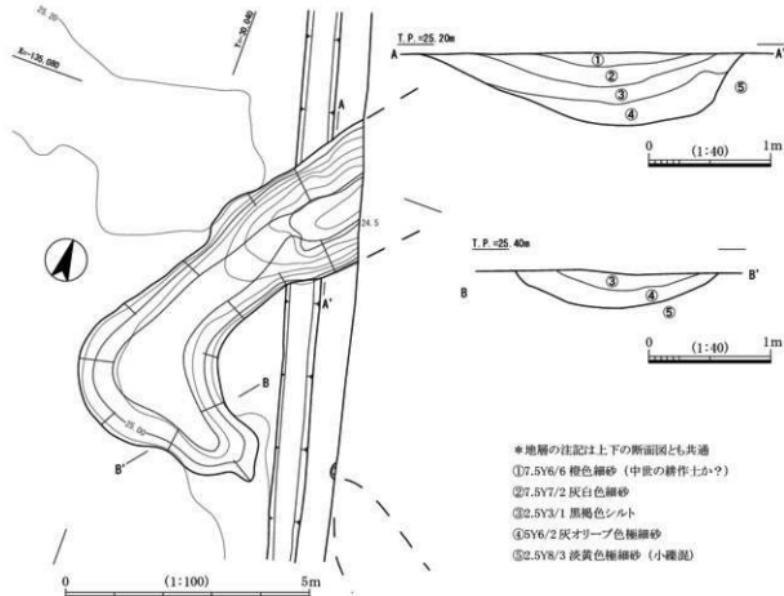
時代中期頃までは完全には埋まりきらず、窪んだ状況を保ち続けていたと考えられる。周溝内から出土した須恵器片は、周溝が徐々に埋りつつある段階に廃棄ないしは流入したものだろう。

墳丘内部は中世の耕作により削平されたものと考えられる。

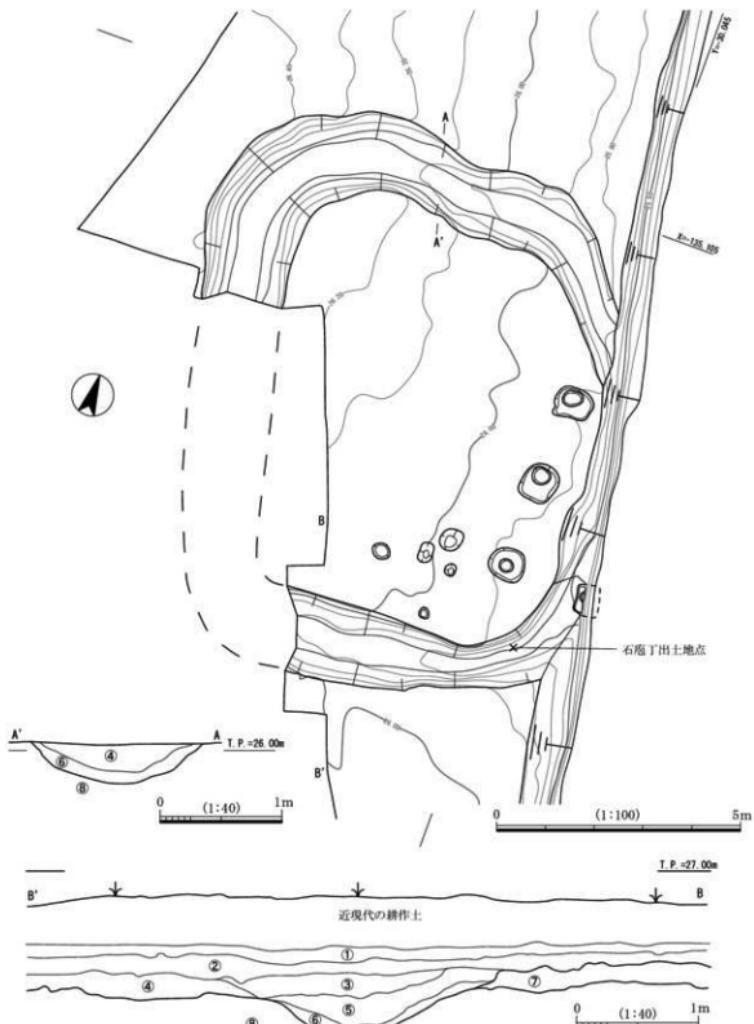
第12図の21から25が方形周溝墓1の周溝内から出土した土器である。21は壺の底部で、内外面の調整は不明。22は広口壺の口縁から頸部にかけての破片。口縁が大きく聞く形状を呈する。頸部外面には縱方向のハケ調整を施した後、櫛描紋を施す。内面調整は不明。23は壺の底部。内外面の調整は不明。22と23は同一個体の可能性がある。いずれも南東側周溝（第9図グレートーン部分）の最下層埋土中から、周溝底面に接地した状況で出土した。24は高杯の破片で、内外面ともに調整は不明。25は壺の底部。外面の調整は不明だが、内面にはナデ痕跡がみられる。21から25のうち時期決定可能な遺物は22で、弥生時代中期前半（畿内第II様式）のものと考えられる。

方形周溝墓2（第6・10図、図版2-1）1区の南側で方形周溝墓の一部を検出した。検出した範囲は方形周溝墓の北西部分で、本来の墓の10分の1程度の面積にあたる。北西部のコーナーのみの検出であるため、方形周溝墓の規模はわからない。周溝はコーナーから南東よりの部分で途切れる。なお調査区の東端で狹小な落込みが検出されているため、ここから南東方向にむけて周溝が伸びる可能性もある。周溝の深さは方形周溝墓1同様均一ではない。コーナー付近では周溝は浅く、検出面から底面までの深さは20cm程度である。検出された範囲での周溝北端において、検出面から底面までの深さは70cmを超える。

周溝の埋土は浅い箇所で2層、深い箇所で4層に分けられる。最下層（第10図④）は墳丘盛土の崩落



第10図 方形周溝墓2平面・断面図



- ①10YR5/3にぶい黄褐色細砂（礫混）
＊①は中世の耕作土層、基本層序でいう第1層
②2.5YR3/2 黒褐色細砂（小礫混）
③2.5YR3/2 黑褐色細砂ブロックと、5YR5/3にぶい赤褐色細砂ブロック
④5YR5/6 明赤褐色細砂（小礫多く混）
＊②・③・④は古墳時代中期から古代の包含層、基本層序の第2層
- ⑤5YR4/4にぶい赤褐色細砂（礫混）
⑥5YR7/3にぶい橙色細砂
＊⑤・⑥は弥生時代の包含層、基本層序の第3層
⑦10YR4/4 橙色細砂（礫混）
＊⑦は周溝墓の盛土からただし地盤の上部には須恵器が混入する。
そのため基本層序の第3層としたえた
⑧2.5YR5/6 明赤褐色細砂（基盤層）、基本層序の第4層

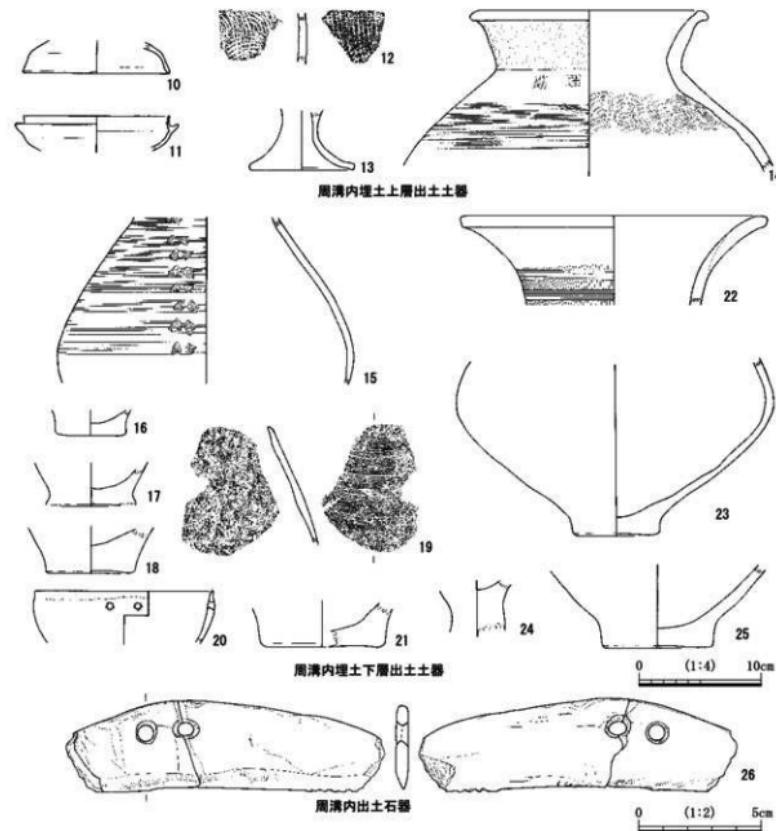
第11図 方形周溝墓3平面・断面図

土と考えられ、方形周溝墓1同様、内側の堆積が厚く外側の堆積は薄い。最下層の上層（第10図③）は黒褐色のシルトで、層中からは後述するとおり須恵器が出土している。これも方形周溝墓1と共に通する事柄で、両者は同じ埋没過程を経たといえよう。

第12図の12から14と、15から19が方形周溝墓2の周溝内から出土した土器である。

12は土師器で、壺の胴部片である。土師器ではあるが外面に格子目タタキ痕跡、内面に同心円状のタタキ痕跡がみられる。13は土師器高杯の脚部片。内外面の調整は不明。14は須恵器壺の口縁部から胴部にかけての破片。胴部外面にカキ目、内面に同心円状のタタキ痕跡がみられる。周溝埋土の上層部分（第10図③）から出土した。いずれも6世紀代のものと考えられる。

15は壺の胴部から頸部にかけての破片。胴部の最大径は23.8cmを測る。外面には8条の直線紋が確認でき、各条の中に扇形紋を2個1単位として継位置を描えて配置している。この紋様は擬似流水紋を意



第12図 周溝内出土土器・石器実測図

識したものと考えられる。内面の調整は不明。16は壺または甕の底部片で、内外面の調整は不明。17は甕の底部片で、内外面の調整は不明。18は壺の底部片で、内外面の調整は不明。19は無頸壺の口縁から体部片。外面には擬似流水紋を施す。内の調整は不明。15から19のうち時期決定の可能な遺物は15と19で、これらは弥生時代中期前半（畿内第Ⅱ様式）のものと考えられる。

方形周溝墓3（第7・11図、図版3-1） 2区の南西高台部分で検出した。西側の周溝の一部は近世以降の水田耕作で削平されている。東の周溝の大半は調査区外に位置する。周溝内側下端から割り出した墳丘裾間の距離は南北で9m、東西で推定8mとなる。墳丘の盛土は下部が一部残存しているが、盛土と考えられる地層の上部からは須恵器が出土するため、墳丘築造当時の遺構面（機能面）は削平されたと考えられる。周溝底は西側が高く、東側が低い。周溝の深さも西側が浅く30cm、東側が深く40cmである。これは旧地形が、西から東へ向けて低くなる傾斜を反映した結果と考えられよう。

周溝の埋土は3層ないしは2層である。最下層（第11図⑥）は墳丘築造後、周溝が止水堆積状態にあつたなかで、周辺から細砂や極細砂で流れ込んで形成された地層と考えられる。この地層中からは、後述する石庖丁が出土した（図版3-2）。最下層の上層（第11図④）は墳丘からの崩落土と考えられる。周溝の内も墳丘側の堆積が厚いのは、先述した方形周溝墓1・2と同様である。さらに上層（第11図③）からは、後述するとおり古墳時代の須恵器が出土しており、同時代においても周溝が窪地状を呈していることがわかる。これもさきの方形周溝墓1・2と同様である。

第12図の10・11・20・26が方形周溝墓3の周溝内から出土した須恵器・弥生土器・石器である。10は須恵器の杯蓋、11は須恵器の杯身である。方形周溝墓3でも6世紀代では、周溝は埋まりきっていなかったといえる。

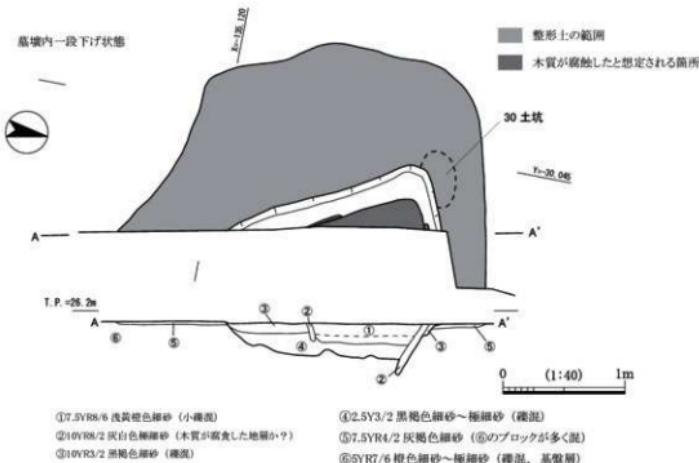
20は無頸壺の口縁部から胴部にかけての破片。口縁部に2箇所の穿孔がみられる。穿孔は外面から内面にむかって焼成前におこなわれている。外面口縁部にはさほどナデ調整がおこなわなかったためか、粘土の接合痕跡が横方向に明瞭に確認できる。内外面の調整は不明。

26は周溝内の最下層中から出土した石庖丁である（図版3-2、出土地点は第11図参照）。粘板岩製。片刃で直線刃、半月形である。刃面の紐孔間に紐による擦痕が認められ、溝状の凹みが形成されている。背面（刃面の裏）には背の部分に擦痕がみられる。重量は50.5gを測る。

28木棺墓（第7・13図、巻頭図版1） 2区の南端で検出した木棺墓。墓の西半が残存する。東半は残念ながら近現代の搅乱を受けたため残存していない。第3層を除去した時点では、墓壙と底板の木質が土壤へ変化した痕跡が認められた。また墓壙の周囲には不整形な浅い土坑の輪郭が確認された。残存する範囲で短辺60cm、長辺168cmを測る。墓壙の埋土は細砂ないしは極細砂で構成され、白色の礫（径4mm前後）が混じる。周辺の基盤層や他の遺構埋土と比べると粒径が細かく、礫の混入量も少ない。このためある程度精製された土が墓壙に埋められたと考えられる。

墓壙内部を一段下げた段階で、検出面では明瞭に確認できなかった底板の範囲が確認できた（第13図、巻頭図版1-1）。底板の部分は木質が土壤に変化したためか、やや白みを帯びた褐色の土壤となっており（第13図①の下部）、周囲の墓壙埋土とははっきりと区別できる。ただし白みを帯びた層は、想定される底板の厚さより厚いため、底板の木質が周辺の土壤に影響を与えた結果とも考えられる。

搅乱部分の断面では、底板の両側に斜め方向に走る灰白色の層が認められる（巻頭図版1-2）。断面むかって右側（北側）の灰白色層は墓壙の底面を突き抜けている。平面でこの層のひろがりを確認したところ、わずか5cm程度の範囲でしか確認できなかった。以上のことからこの層は、T字型の小口板



第13図 28木棺墓平面・断面図

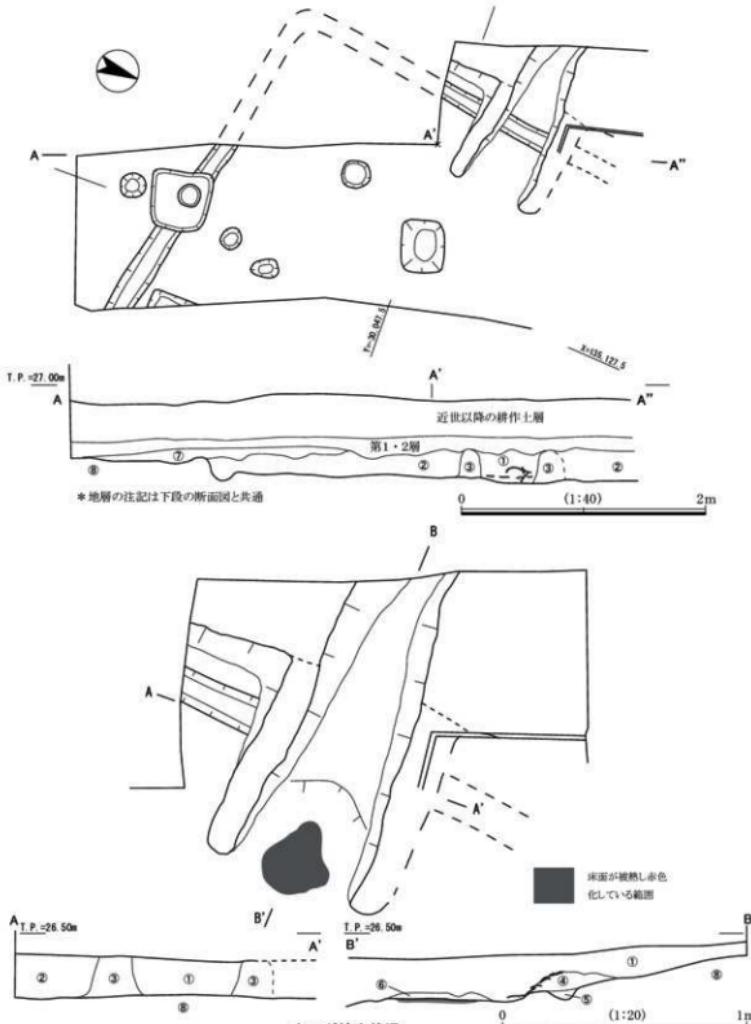
の下部の残存と考えられる。なお小口板を差し込むための掘形は確認できなかった。いっぽう断面図のむかって左側（南側）の灰白色層は、墓壙の底面までは伸びず、底板痕跡と考えられる層の底部にも達しない。平面でこの層のひろがりを確認したところ、墓壙長辺に沿って25cm程度の細長い範囲で層の残存がみられた。このことから南側の灰白色土層は側板の痕跡と考えられる。

以上のように当該木棺墓は、T字型の小口板を持ち、側板は底板よりも低く設置されないものであることがわかる。これは福永伸哉氏の分類によるI-b類（福永伸哉1985「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第1号 考古学研究会）にあたるが、底板がH字型であったのか長方形であったかはわからない。

墓壙の北東端では不整形な浅い土坑の輪郭が確認された。この土坑は墓壙にさきだって埋没しており、その埋土は基盤層（第13図⑥）のブロックを多量に含むものであった。この埋土は、人為的に埋め戻す際の整地土と考えられる（第13図グレートーン部分）。当該土坑の埋土を除去した後に、さらにこの土坑に先行する30土坑が確認された。このことから28木棺墓を構築する直前の旧地盤は、土坑や凹凸のある形状を呈していたと想定できる。そのような旧地盤を平坦化するためにブロック土を用いたと解釈できる。

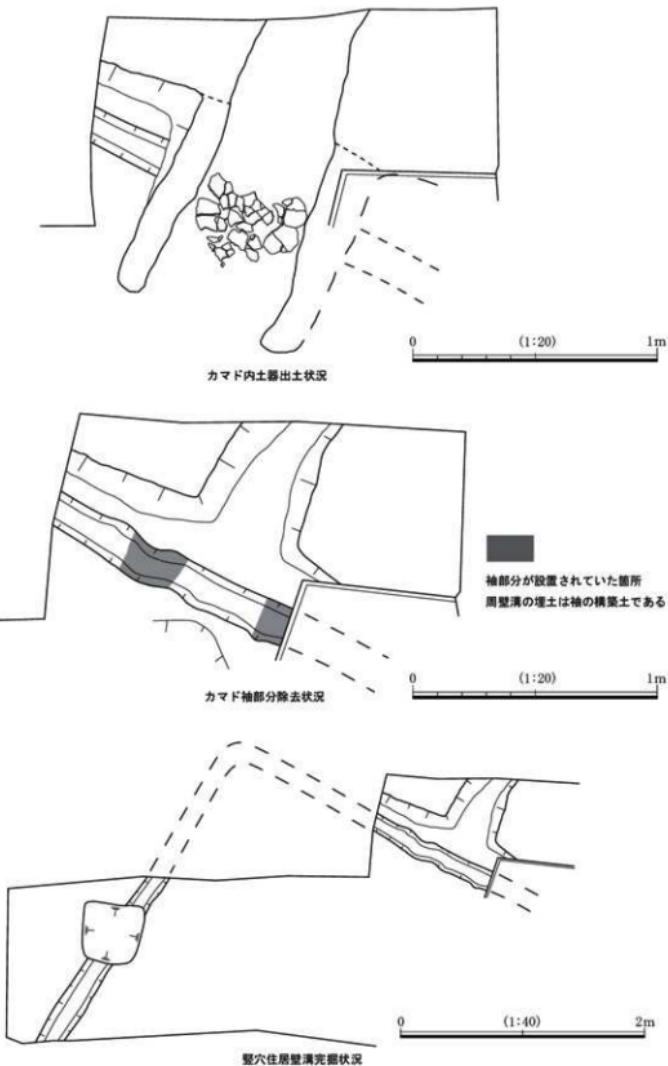
第3節 古墳時代の遺構と出土遺物

竪穴住居1（第7・14・15図、図版2） 2区の南端で竪穴住居の周壁溝とカマドを検出した。検出された周壁溝は、住居の南側と西側の一部である。住居の北西隅が調査区内に入ると考えられるが、上層（第1層）の擾乱を受けていたため確認できなかった。検出した周壁溝を延伸すると、調査区外の西側に南西隅があると推測できる。南辺周壁溝の断面図観察から、周壁溝の外側に基盤層をあえて高く残した箇所が確認できる。周壁溝の外側に沿って周堤が巡っていたのだろう。周堤の上部には、住居の



- ①7.5YR4/3 橙色細砂（橙色細砂ブロック・炭片・赤色焼土塊混）
 ②10YR5/2 灰黃褐色細砂（炭片・赤色燒土塊混）
 ③10YR7/4 にぶい黄橙色極細砂（わずかに小礫混）
 ④5YR5/6 明赤褐色極細砂（大井崩落部分）
 ⑤2.5Y5/2 緋灰黃色細砂
 ⑥2.5YR4/4 にぶい赤褐色極細砂（床面の貼り土）
 ⑦7.5YR5/3 にぶい褐色細砂（壁の崩落分か）
 ⑧5YR7/6 橙色細砂～極細砂（雜混、基礎層）

第14図 穂穴住居 1平面・断面図



第15図 竪穴住居1 カマド平面図・周壁溝完掘状況図



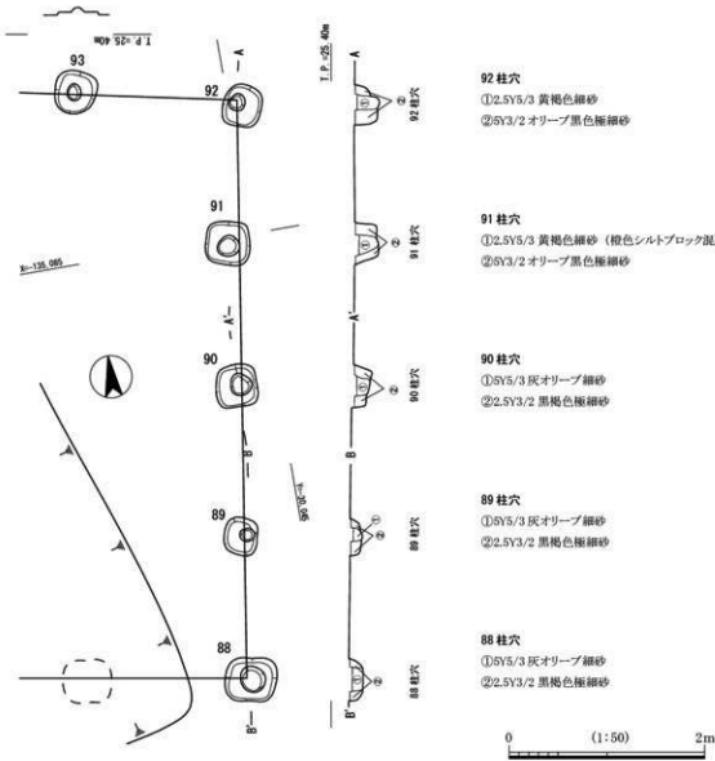
第16図 構造出土土器実測図

埋土に重なる形で厚さ10cm程度の層がひろがる（第14図⑦）。断面観察のみから確言できないが、壁材が住居の埋没過程で崩れた痕跡かもしれない。

カマドは西辺に位置し、煙出しの先端部は調査区外に出る。焚口の幅は袖の外縁間で80cm、袖の内縁間（開口部の最下面）で52cmである。全長は煙出しの尖端が調査区外におよぶため不明である。住居の床機能面から焚口袖部の上端までの高さは30cm弱である。第2層除去時にカマドの上端と、カマド内で土器の散乱が認められた。これらの土器はカマド床面上もしくは、赤色化した天井の崩落土とともに出土している（巻頭図版2-3）。このことからこれらの土器は、カマド廃絶後に天井とともに崩落した煮炊具と考えられる。焚口部の床面の一部では貼り土をした箇所が認められ、貼り土を除去すると床機能面が被熱を受けて赤色化している状態が確認できた（巻頭図版2-3・4）。赤色化した箇所よりやや奥（断面図では右側）では、わずかではあるが旧地盤が窪んでいる箇所がある。赤色化していない事実から考えて支脚が据えられていた箇所であろう。なお支脚は出土していない。カマドから煙出部への傾斜は、周壁溝を超えて住居外に出るあたりから緩やかに上昇する。袖部分に用いられた土はわずかに礫を含むものの、きめ細かい極細砂を用いていることから、カマドを造り付けるために精製されたものと考えられる。

袖部分の貼り土を除去すると、カマドを造り付ける前段階の住居そのものの掘り込み、周壁溝、煙出し用の掘り込み痕跡が確認できた。なかでも周壁溝の掘削と、カマド袖部分の造り付け過程を考えるうえで有効な情報が得られた。第15図中段の平面図はカマド袖部分を除去し、周壁溝内の埋土を完掘した状況を図示しているが、図中のグレートーンの部分、すなわち袖が設置されていた箇所は、他の埋土とは違った様相を呈している。この部分の埋土はさきに述べた、袖部用に精製されたにぶい黄橙色の極細砂であった（巻頭図版2-5・6）。すなわち周壁溝を掘削してさほど間もない段階で、溝を埋めながらカマドの袖部分を設置したことがわかるのである。また袖と袖の間の溝、すなわちカマド内の溝の埋土は焼成行為にともなってか炭化物や焼土が混入している。以上のようにカマド内外にわたる周壁溝の埋土は、①居住期間中開放状態であった袖部分外側の埋土、②周壁溝掘削後に袖部分が設置された箇所の埋土、③カマド内の埋土の三種類にわけることができる。

第16図の28と29はカマドの天井崩落とともに落ち込んだ土器である。破片の数からみて2個体以上の壺もしくは瓶が落ち込んだと考えられるが、口縁部が残るのは28のみである。28は壺の口縁部から胴部にかけての破片で、外面調整は不明。内面は口縁部でハケ目痕跡、胴部で指頭圧痕が確認できる。29は壺の胴部片で、内外面ともに調整は不明。28と29は別個体である。



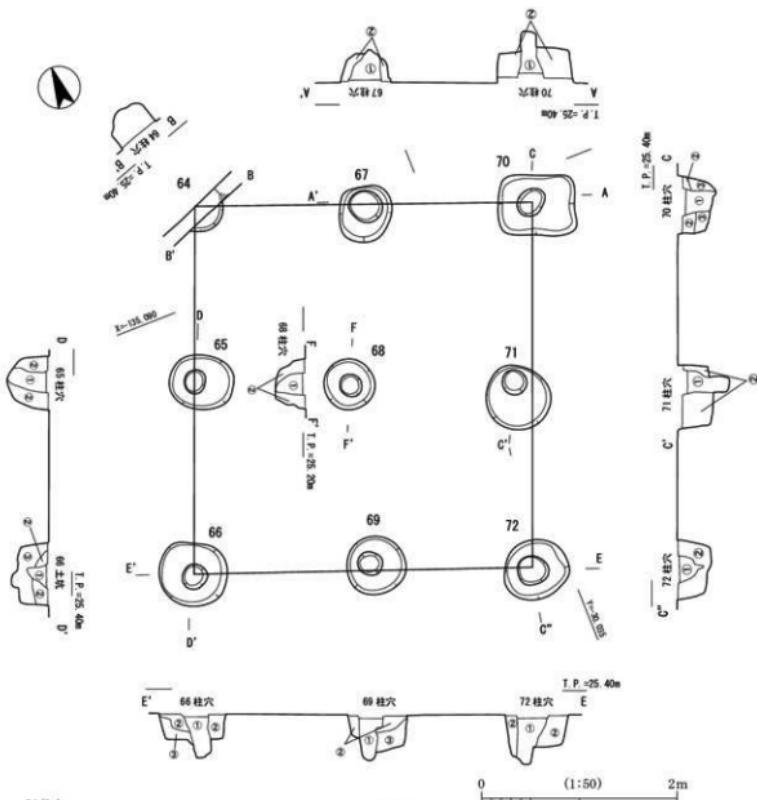
第17図 挖立柱建物1平面・断面図

第4節 古代の遺構と出土遺物

ここではTK209段階以降を扱う。掘立柱建物1～3は柱穴からの出土遺物はないが、後述する44・52溝をこれらの建物群に伴うものと捉えこの時期にあてる。

掘立柱建物1（第6・17図、図版4） 2区の南側で検出した。桁行き4間、梁間2間（推定）の建物。桁行きは東側の柱筋のみの検出で、西側は調査区外になる。東側桁行きの総長は5.94m、柱間は北から1.48m、1.48m、1.5m、1.48m。一尺29.6cm換算で一間5尺の等間となる。梁間は北側のみ検出した。南側は近世以降の水田耕作による削平を受けしており不明。推定2間で総長は不明。建物の軸はN-9°～Eで、やや座標の南北方向からずれる。柱穴の平面形はすべて角丸方形で、断面形もすべて方形。すべての柱穴で柱の抜き取り痕跡を確認した（図版4-2～5）。なお93柱穴では、掘形内を一段下げた時点で埋土が無くなった。なお柱穴からの出土遺物はない。

掘立柱建物2（第7・18図、図版5） 2区の北端で検出した。桁行き2間、梁間2間の総柱建物。北東隅の64柱穴は掘形の一部のみ検出。東側桁行きの総長は3.75m、柱間は北から1.85m、1.9m。西側桁



64柱穴

2.5Y5/1 黄灰色シルト

65柱穴

①2.5Y5/1 黄灰色シルト

②2.5Y4/1 灰色細砂 (橙色シルトブロック混)

66柱穴

①2.5Y4/2 噴灰黄色シルト (雜砂混)

②7.5YR6/4 にぶい 橙色細砂 (灰色シルトブロック混)

③5Y3/1 オーブ 黒色細砂

67柱穴

①2.5Y5/1 黄灰色シルト

②2.5Y4/1 灰色細砂

68柱穴

①10YR6/2 灰褐色シルト (粗砂混)

②10YR6/4 にぶい 黄褐色細砂

69柱穴

①2.5Y5/1 黄灰色シルト

②2.5Y4/1 灰色細砂 (橙色シルトブロック混)

③10YR6/4 にぶい 黄褐色細砂

70柱穴

①2.5Y5/2 噴灰黄色シルト (橙色細砂混)

②7.5YR5/4 にぶい 褐色細砂 (灰色シルトブロック混)

71柱穴

①2.5Y5/2 噴灰黄色シルト (橙色細砂混)

②7.5YR5/4 にぶい 褐色細砂 (灰色シルトブロック混)

72柱穴

①5YR5/3 にぶい 赤褐色細砂

②2.5YR6/4 にぶい 橙色細砂 (灰色細砂ブロック混)

第18図 据立柱建物2平面・断面図

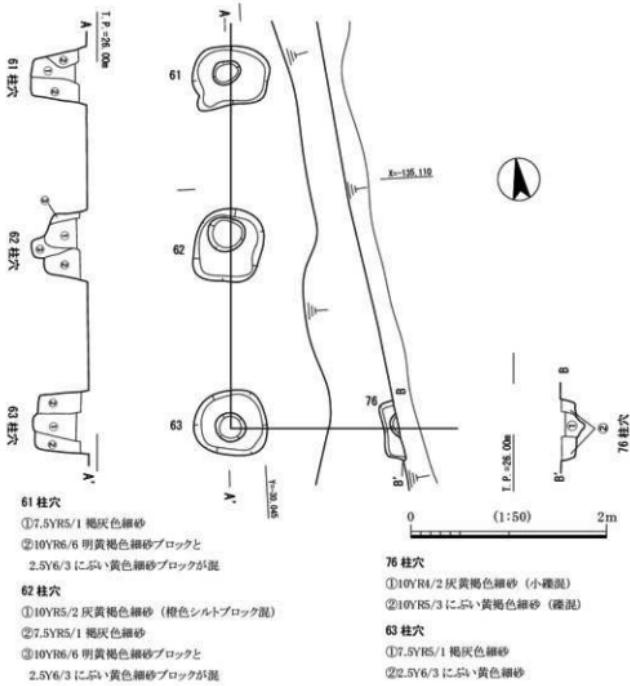


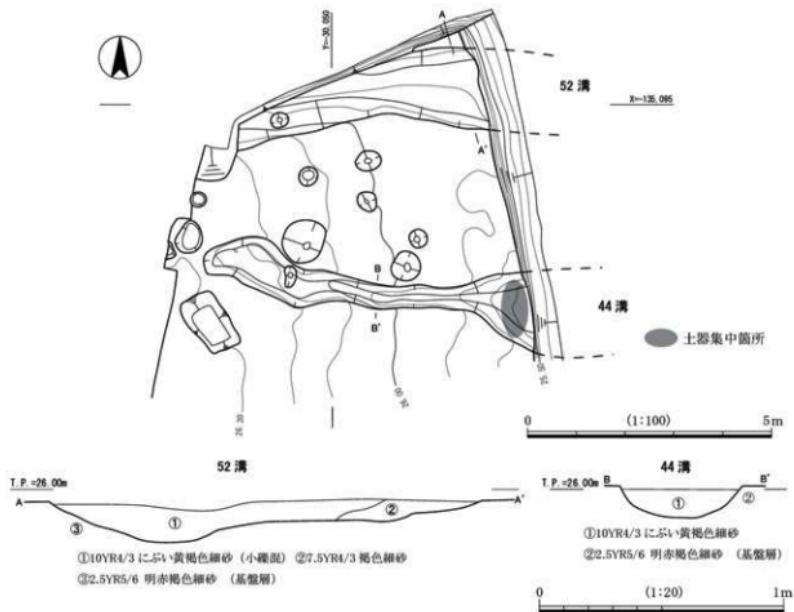
図19 挖立柱建物3平面・断面図

行きの総長は3.75m、柱間は北から1.8m、1.95m。北側梁間の総長は3.5m、柱間はいずれも1.75m。南側梁間の総長は3.5m、柱間は東から1.7m、1.8m。建物の軸はN-21°-Eで、座標の南北方向からずれる。柱穴の平面形は北東隅の70柱穴は方形で、残りの柱穴はすべて円形。断面形は65柱穴のみ円形で、残りの柱穴はすべて方形である。64柱穴を除くすべての柱穴で、柱の抜き取り痕跡を確認した（図版5-2～5、図版6-1～4）。66柱穴や72柱穴の柱抜き取り痕跡は、抜き取り時の倒し方によるものか極端に傾いている。

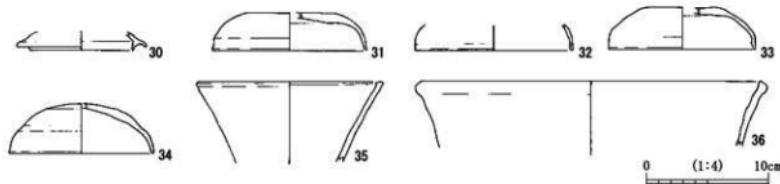
72柱穴のから土師器の小片が出土している以外、他の柱穴からの出土遺物はない。

掘立柱建物3（第7・19図、図版3-1） 2区の高台部分で検出した。桁行き梁間の規模は不明。今回およびこれまでの調査例から考えて、桁行き2間以上梁間2間で南北に軸を持つ建物、もしくは桁行き2間、梁間2間の総柱建物と想定される。建物の軸はN-3°-Eで、やや座標の南北方向からずれる。西側の桁行き柱間は北から1.75m、2.0m、南側梁間の柱間は1.75mである。柱穴の平面形はすべて隅丸方形、断面形もすべて方形である。すべての柱穴で柱の抜き取り痕跡を確認した。柱穴からの出土遺物はない。

構列1（第6図、図版4-1） 挖立柱建物1の東隣に位置する。構列の軸はN-7°-Eで、やや座



第20図 44・52溝平面・断面図



第21図 44溝東端出土土器実測図

標の南北方向からずれる。掘立柱建物 1 とほぼ同方位をとることから、この柵列と建物は同時並存していたと考えられる。

第16図の27は88柱穴から出土した土師器壺（長胴壺か？）の胴部破片である。外面調整は摩滅により不明、内面には土師器であるが同心円状のタタキ痕跡がみられる。

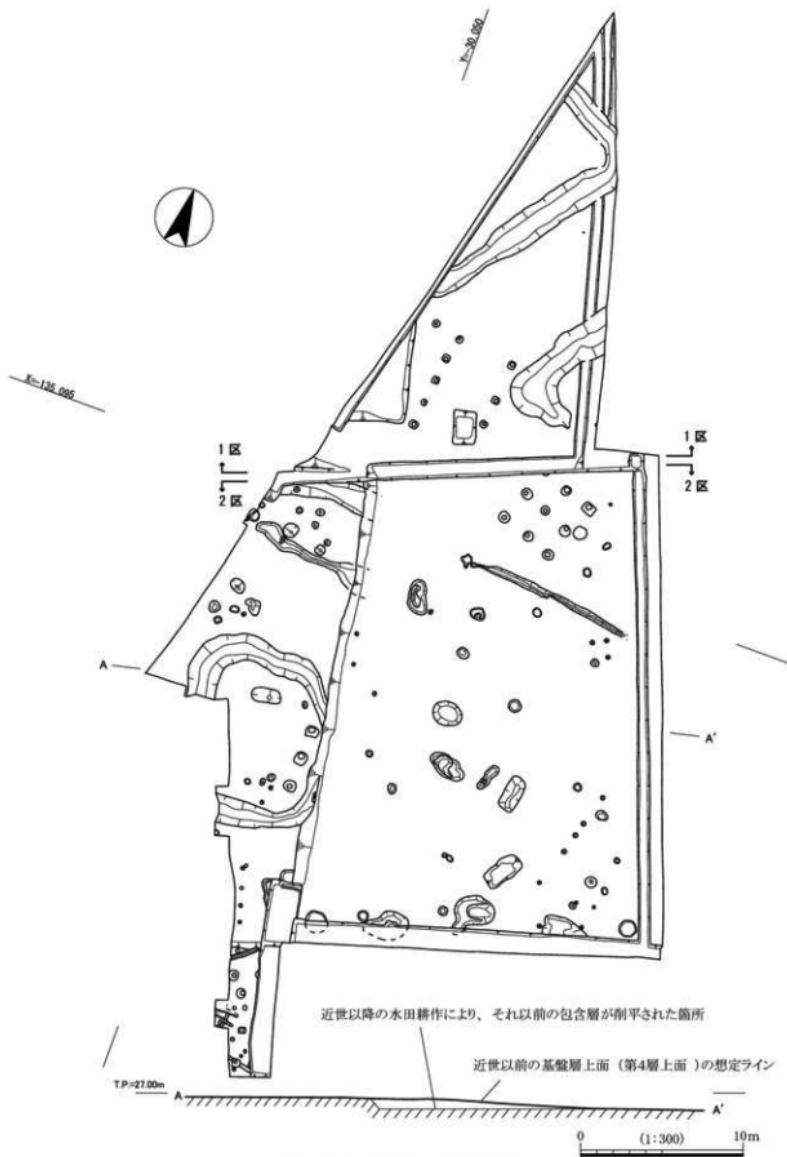
柵列 2（第7図） 2区の南西端で検出した。柵列の軸はN-17°-Eで、座標の南北方向からずれる。掘立柱建物 2 とほぼ同方位をとる。この柵列と掘立柱建物 2 は、距離はやや離れるが同時並存していたと考えられる。なお柱穴からの出土遺物はない。

44・52溝（第7・20図） 2区の高台北側で平行して走る2条の溝。52溝は東側の29溝と繋がる可能性がある。おそらく東へ低くなる傾斜に沿って掘削された溝が、近世以降の水田耕作により削平された結

果途切れたのだろう。溝の途切れている部分が、近世以降に削平された箇所にあたることは第22図に示した。二条の溝は区画溝ないしは道路側溝か。ただし両溝間の包含層および包含層直下の旧地盤は、さほど固く締まってはおらず道路側溝と即断できない。

44溝の東端部（第21図グレートーン部分）から、30から36（第21図、うち31・34～36は図版8）の須恵器が出土している。30は杯Gの蓋でツマミ部分は欠損。最大径10.1cm。31から34は杯Hの蓋。31は最大径12.6cmで、天井部外面は回転ヘラ切り後未調整、それ以外は回転ナデをほどこす。32は最大径11.7cmで、天井部を欠損。33は最大径11.8cmで、天井部外面は回転ヘラ切り後未調整、それ以外は回転ナデをほどこす。34は最大径11.8cmで、天井部外面はヘラ切り後静止ナデ、それ以外は回転ナデをほどこす。35は平瓶の口縁部で口縁径24cmを測る。口縁端部外面は肥厚する。内外面ともに回転ナデをほどこす。36は壺の口縁で、口縁径は29.0cmである。30の須恵器はTK217段階に、31から34の須恵器はいずれもTK209段階にあたる。ただしこれらの須恵器が溝の機能時に流れ込んだものか、人為的に溝を埋めるさに紛れ込んだものかは判断しがたい。

ここではあえて、44・52溝の開削直前から廃絶までの間が、TK209から217段階（7世紀初頭から中期）にあたる可能性を指摘しておく。なお52・29溝からの出土遺物はない。



第22図 上の山遺跡09-2 遺構全体図

第6章　まとめ

今回の発掘調査で得られた成果を時代ごとにまとめる。

(1) 弥生時代　3基の方形周溝墓と1基の木棺墓が検出された。墓の築造時期はいずれも弥生時代中期前半（畿内第II様式）である。この時期は既往の調査（センター2007『上の山遺跡Ⅱ』）で検出された独立棟持柱を持つ掘立柱建物が営まれた時期にあたる。また同時期の方形周溝墓は、今回調査地の北側でも6基検出されている（センター2008『上の山遺跡Ⅲ』）。このことから上の山遺跡の南側が居住域、北側が墓域であったことがわかる。

(2) 古墳時代　竪穴住居1棟が検出された。住居は調査区の南端で検出された。時期決定の可能な出土遺物が土師器壺に限られるため、住居の機能期間はおおまかに5世紀と捉えるのが限界である。今回調査地の南側にあたる既往の調査では、5世紀前半の竪穴住居が検出されている（センター2007『上の山遺跡Ⅱ』）。また今回調査地の南西にあたる茄子作遺跡では同時期の須恵器窯（推定）、竪穴住居が検出されている（センター2008『茄子作遺跡』）。また今回調査地の北側の調査では古墳時代の遺構は確認されていない（センター2008『上の山遺跡Ⅲ』）。以上のことから、茄子作遺跡から上の山遺跡南部にかけては5世紀代の集落が広がっていたと予想され、今回調査地の南端は集落のほぼ北限にあたるのだろう。

(3) 古代　掘立柱建物3棟、柵列2条、区画溝もしくは道路側溝が検出された。建物と柵列の主軸、溝の方向からあわせて考えると、この時期の遺構変遷は以下の2段階に分けられる。

1段階：掘立柱建物2と柵列2

2段階：掘立柱建物1・3と柵列1と44・52・29溝

この遺構変遷は今回調査地の南側での調査成果（センター2005『上の山遺跡Ⅰ』）とも対応する（第23図）。1段階が『上の山遺跡Ⅰ』記載の掘立柱建物1にあたり、2段階が同書記載の掘立柱建物2・3と柵列1にあたる。遺構から出土している時期確定の可能な出土遺物は、44溝出土須恵器に限られるが、包含層資料なども加味して1段階から2段階までの間を6世紀末から7世紀中頃にあてておく。1段階の建物方位はやや正方位からずれているのに対し、2段階の建物や溝はほぼ正方位に沿った形で施工されている。このことから天野川西岸の丘陵地帯において、正方位を指向した地割が上述の時期に現れる可能性を指摘できよう。



第23図 今回の調査成果と既往の調査成果

